

コラム「衆議院の防災訓練」

地震、台風、火山の噴火等自然災害の多い日本の国土の特徴に鑑み、国は、広く国民が災害についての認識を深め、これに対する備えを充実強化することで、災害の未然防止と被害の軽減に資するよう、毎年「防災の日」（9月1日）及び「防災週間」（8月30日から9月5日まで）を設けています。この期間、全国各地で実践的な防災訓練や、防災に関する啓発活動が行われています。

衆議院では、毎年防災の日に合わせて（9月1日が土日の場合は平日）、警務部、管理部、憲政記念館を中心として、災害発生時に迅速、的確かつ安全に対処できる体制を構築できるよう、総合防災訓練を実施しています。例年であれば、院内各部署からの代表者が参加し、緊急地震速報による対応行動として衆議院本会議場から国会中央玄関前の広場への避難誘導訓練を実施するとともに、広場では、防災テントの組立てや放水訓練等も行っていました。

しかし、令和2年は新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっていることから、訓練の参加者が密になる状況を回避する必要がありました。このため、同年の総合防災訓練は、院内の各建物内での訓練を中心に実施して、多数の者が集まる大規模な訓練を取りやめるとともに、参観者ホールでは防災資機材の展示を行いました。また、同年からの新しい試みとして、タブレット端末を利用して各建物間のリモート会議訓練を実施しました。



令和2年のリモート会議訓練の様子

令和元年の防災訓練の様子



展示品の一部（バルーン投光器）



コラム「議長～オ！（議事進行係）」

「議長～オ、〇〇されることを望みま～す！」

衆議院の本会議を見ていると、時々、議席から大きな声でこんな調子の発言をしている議員がいます。この議員が「議事進行係」です。議院運営委員会の申合せに従い、議事進行のための動議を提出する役割を担っています。

議事進行係は、与党第一会派の、多くは当選2～3回の議員の中から、会派の推薦に基づき、議院運営委員会の決定で選出されます。会派の中では、議事を円滑に進めるに当たってふさわしい議員を、会派の国会対策委員長が中心となって選んでいる、とされています。元気がいい議員、声が大きい議員が選ばれるのでは、という説もあります。

若手議員の間では憧れのポストで、「やってみたい。」と思う議員は少なくないし、「次は誰だろうね。」などと話題にもなるといいます。歴代担当者の中には、後に内閣総理大臣に就任した議員を始め、内閣や政党の要職で活躍するようになった議員がたくさんいます。経験者は「それが励みになっている。」とのことで、正に若手の登竜門と言える役割です。女性も、これまでに6人が担当しました。

満座の中で大音声を取り上げる役割なので、やはり最初は緊張、緊張。それでも、与野党問わずいろいろな議員から声をかけられて、褒められたり、「過去の担当者は…」といった話を聞いたりする。また、テレビでその様子が放映されると地元からも反響がある。「そんな風に認知されるという意味では魅力のあるポスト」、「だからこそ一層身が引き締まる。」と経験者は語っています。さらに、「議会運営というものを理解する貴重な機会になった。」と語る経験者もいます。

一方で、失敗できないというプレッシャーも相当なもの。「特に、各種委員の役職名等と言にくいものがあつたりすると、言い間違えてはいけない、しかし声は伸びやかでないといけない、ということで、緊張しながらやっている。」とか。それでも、「自分は議員を代表して議長と対話する立場」という意識で、力一杯、役割を果たしています。

独特の口調については、なぜそうしているのか、正確なところは不明のようです。ただし、マイクがなかった帝国議会時代に「独特な抑揚で大きな声で議場いっぱい響きわたるように工夫された議事進行の発声」と説明している文献があります。



中央で起立しているのが議事進行係

議事進行係が置かれているのは、衆議院だけです。かつては、参議院でも選挙手続省略・議長指名の口頭動議が提出されていましたが、1993（平成5）年3月からは、議長から発議することができるとされています。

議事進行係は今や衆議院だけの伝統であり、一つの政治文化。「効率だけで語ることなく」、「国会見学の時などには身近に感じて欲しい。」とは、経験者の意見です。

（参考文献：前田英昭「議事進行係は将来の総理」国会月報1991年10月号）

コラム「正玄関前の噴泉」

言論の府である国会の主要施設といえば、本会議場や委員室ですが、隠れた人気スポットは、正玄関前の噴泉です。見学者や各国の議員団等の記念撮影の背景にも使われています。

この噴泉は、平成2(1990)年の議会開設100年を記念して衆議院、参議院の正玄関前に一基ずつ設置され、同年11月28日に衆参合同で噴泉通水式が行われました。

噴泉の設計は、元日本建築家協会会長の芦原義信博士によるもので、高さ4.5m、中央の柱の上に4m四方の水盤を載せ、水盤上部から水が滝状に流れ落ちる構造になっており、落水池は10m四方、その周囲を円形の植え込みが取り囲んでいます。柱の中央が僅かに膨らんでいる設計のため、ギリシャ神殿の柱のような安定感があります。

噴泉の運転は通常9～18時で日没後は水中照明と投光器により、ライトアップされます。国会議事堂の塔屋のライトアップは日没後20時までなので、日の短い時期には両者のライトアップを楽しむことができます。



噴泉全景



ライトアップされた国会議事堂の塔屋と噴泉

また、噴泉は、皇居から国会周辺にかけての緑豊かな環境の一部をなしています。平成7(1995)年5月下旬、噴泉周囲の植え込みで孵化したカルガモの雛^{ひな}7羽と親鳥1羽が、噴泉に移り住み、広く報道されるなど注目を集めました。7月下旬に雛^{ひな}が巣立ち皇居方面に飛び去るまでの約2か月間、衆議院事務局は、噴泉の運転を停止し、周囲に金網を張り、屋根付きの餌台を設置して餌を与えるなどして温かく見守りました。



発見された当日のカルガモの親子



巣立ち数日前のカルガモの雛^{ひな}



手ずから餌を与える
鯨岡副議長(当時)(左)

鳥類保護議員懇話会会長でもあった鯨岡副議長は、巣立ちまで何度も様子を見に来られました。

コラム「世界の国会議事堂 — ハンガリー 」

ハンガリーの首都ブダペストは、その街並みの美しさから「ドナウの真珠」とも称され、街の多くの部分が世界文化遺産に登録されています。その中でもドナウ河に面して宮殿のような佇まいを見せる国会議事堂は、「世界で最も美しい」議事堂といわれており、イギリス以外では唯一のゴシック・リヴァイヴァル様式の議事堂です。

議事堂のすぐ近くにある「くさり橋」が架けられたことによって、もともとブダとオーブダ、ペストと分かれていた街が合併し、1873年に「ブダペスト」が誕生しました。議事堂の建設が決定された1880年は、オーストリア＝ハンガリー二重帝国時代で、この時代に、ハンガリーは経済的にも文化的にも大発展を遂げ、オーストリアのハプスブルク家からの独立の機運が高まり、ウィーンの議事堂をしのぐほどのものを目指し、国家的なアイデンティティの象徴として絢爛豪華な建物を建設したといわれています。



ドームホールの中央に展示されている聖王冠と衛兵

1885年に着工され、1902年に完成した議事堂は、コンペティションで設計を決定し、折衷主義を基本として、ゴシック様式、ルネッサンス様式、バロック様式が溶け合い、691の部屋が連なる長さ268m、奥行き123m、

高さ96m、総面積約1万8,000㎡のハンガリー最大の建築物で、装飾には40kgの黄金が使用されました。建設当時の国会は二院制であり、議場の大きさ・形は同一で、両院の平等を表しており、その間にあるドームは、2つの議会の共同開会のための会場となり、議会の統一を意味しています。

現在のハンガリーは、議院内閣制を採る共和国で、立法府は一院制となっており、国家元首は大統領で、政府の首班は首相です。議事堂の中には議会だけではなく、大統領や首相の執務室もあり、また、ハンガリー王が約900年間代々受け継ぎ、王国を象徴する聖王冠と宝珠や宝剣、王笏などの戴冠式用の品がこの議事堂内で保管展示されています。



ドナウ河から見た国会議事堂



国会議事堂正面の大階段



旧上院議場

(参考：ハンガリー国民議会HP、旧ハンガリー政府観光局資料、国土交通省HP)